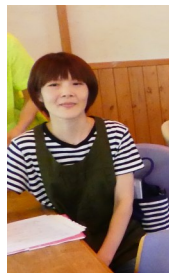


認知症実践者研修を終えて・・・

野々山いづみ

今回6日間の認知症実践者研修を受けさせていただきました。あいわの住人さん1名を事例にあげさせてもらい、スタッフ同士いろいろな意見を出し合いながら目標・計画を立て実践に取り組みました。その結果からスタッフの適切な関わり方で認知症の方の心理状態にどれだけ大きな影響を与えるかが分かり、住人さんのBPSD（行動心理症状：徘徊や収集癖等）も大幅に減りました。住人さんの一つひとつのサインを見逃さないようにし、研修で実施した対応で良い反応を得られたケースをスタッフで共有し、施設の中でも安心や心地よさを感じてもらえるような環境をこれからももっと増やしていきたいです。いつもその方が置かれている状況をその方の立場に立って一番に考え、より良いケアにつなげていきたいと思います。



2018年春の思い出



今年の桜は天気恵まれて皆で楽しむことができました。家族様も一緒に出掛けられて賑やかでした。桜に負けない笑顔いっぱいの住人さんです。



“春祭り”お寿司と天ぷらの出来立てを頂きました。お庭のチューリップも満開。この時期は愛知牧場の菜の花も見ごろです。



地下にあいわカフェが出来ました(笑)まだ改装中！



畑仕事は楽しいな♪たくさん収穫できたら今日のご馳走です。



外出や外食の企画は皆さんにとっては大きな楽しみです。お気に入り店でのお買い物！

編集後記：6月に入り、いよいよ梅雨の季節になりました。梅雨と言え、雨が多く、洗濯物が乾かないなど、あまり過ごしやすい季節ではありませんが、植物の成長には欠かせない水（雨）ではあります。近年、この時期の雨が災害をもたらすこともあり、気象情報が日々の生活の中でより重要なものとなってきています。テレビからの情報だけでなく、インターネットからも有効な情報が得られるようになりましたので、洗濯や買い物等に上手に活用していきたいです。

N.Y

5月、母の日に。

「母・二宮 郁子」

入居中ご家族からのお便り 次男 二宮雅信

若い頃中学校の国語の先生であった母親に7年前に認知症が降りかかりました。認知症は記憶を喪失させるだけでなく、読み書きが好きだった母親から読み書きする気力も無くさせていく病となりました。母親の記憶が薄れてゆく中、ひとつ気付いたことがありました。それは、母親の人生にとって大切に嬉しかった「よい記憶」が残っていることでした。5年間半「あいわ」さんの献身的で親身あるお世話に与り穏やかさを回復していましたが、全介助が必要な状況になり「のぞみ」さんに移った頃にはよく大声を出すような状態に母親はありました。大声を出した直後は眉間にしわを寄せる表情をするので、言いたいことが言えないもどかしさが母親にあるのだらうと思いました。

ある日大声を出した後に一つの言葉を母親に言いました。「ハレル・ヤ」という言葉です。「主を褒め称えます」という意味の聖書の言葉です。この言葉を家族の後に続いて口ずさむと、眉間のしわはなくなり笑顔が戻りました。母親にとってこの言葉はどんなにか支えとなり、また、愛していた言葉なのか伺い知れました。初めて海外旅行をした先は嫁の国のエチオピアでした。その地では「ハレル・ヤ」が溶け込んでいる毎日の生活です。「エチオピアに行きたい」と尋ねると、殆ど言葉を失いかけた母親から時折「行きたい」という言葉が返されます。母親の「よい記憶」を留め続け、日々献身的に親身になって接して頂いている「のぞみ」さんの関係者のおひとりおひとりに心より感謝申し上げます。母親も「ありがとうございます。ハレル・ヤ」と大声でいいたいのだらうと思いつつながら。

(2018年5月記)



嫁：「エチオピアに行きたい？」
母親：「行きたい」・・・「ハレルヤ」 2018年1月11日撮影

「母・綾子の思い出」 2013年7月～2017年8月
ご家族の思い出 長男 石黒武彦

昭和20年ごろは、対馬海峡を渡る船のほとんどはアメリカの潜水艦に沈められていたもので、その6月に私たち母子が下関へ上陸できたのは奇跡でした。母の無謀さを親戚中がなじったのも当然かもしれません。しかし第1子を死産した母には、その後に授かった2人の子供はなにものにも代え難く、「生」へのわずかな可能性に賭けたのだと思います。

日本政府が流す大本営発表というデマ放送は、その時点でも日本軍の「連戦連勝」を発表していたようですが、日を追うごとに日本へ近づく戦場に政府の嘘を見抜いた母は、周囲の誰も信用できない時代だったので、戦地の父にも告げず4歳の私と1歳の妹を伴って、大陸からの帰国を強行したのです。少女時代から好きだった読書が物事の先を見る目を培ったのでしょうか。人前に出るのが嫌いなのに思い切った行動に出る母の性格は、多分に水戸人の血のせいじゃないかと考えるのです。

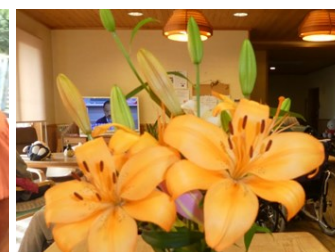
母は400キロも離れた名古屋へ嫁ぐとき、「金持ちになる」と人相見に占われたそうです。父と金物屋を営み人生の半ばを過ぎたこと、店先に座り「あの卦はなんだったろう」と占いの言葉を思い出した時、金っ氣の物に囲まれている自分にハタと気づき大笑いしたそうです。日進に転居してから、庭じゅう花木を植えて農作業に励んだせいか、90歳ごろまで足腰はたしかで紀寿100歳の祝いの席でも意思表示はハッキリしていました。

ご縁があって愛知三愛福祉会で母を見ていただきました。田舎育ちの母にとっては願ってもないのどかな環境と、スタッフの皆さんによる家族同然の心のこもった介助で安らかな4年余の日々を経て、2017年8月の朝、彼岸へ穏やかに旅立ちました。1世紀と5ヶ月と4日に亘る人生でした。

末筆ながら改めて、のぞみ・国際病院の方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。



敬老金受渡 2016年9月14日



「母が好きだった百合が今年も咲きました！」施設に持って来られました